

回大会)、「教育心理学における専門家養成の問題」のシンポジウムへの参加(教育心理学年報第21集, 1982), 新版の心理学事典(平凡社, 1981)への執筆, 「小学生

の心理(有斐閣 1981)を松田惺と編集, など。
(1982年8月末)

研究経過報告 昭和56年度

田 畑 治

1. カウンセリング過程の研究。このテーマ領域に関する近年の筆者の関心は, 単一事例の“生”の取り組みを浮き彫りにし, その過程で加味した特殊治療技法(たとえばフォーカシング, 夢分析など)の効果をもみようとするところにある。この年度には, 心理臨床全国研究集会(第3回心理臨床家の集い)で「カウンセラーに転身を計ろうとした不惑の企業マン」と題する症例の発表を行なった。前田重治九大教授の精神分析の立場からのコメントを拝ぎ, この症例の取り組みに新しい視野を開くことができた。また依頼によってであるが, 「治療面接——カウンセリング」(「教育と医学」特集面接, 第29巻第11号)で, 治療面接・カウンセリングの本質, 機能, 治療関係のなかでのカウンセラーについて論じた。

2. 心理臨床家の養成, 教育・訓練問題について。

先に記した心理臨床全国研究集会が, この年度は関西地区(大塚義孝京女大, 河合隼雄京大両教授ら)の世話で, 12月6, 7の両日, 大津びわ湖畔・ホテル紅葉を全館借りきりして開かれた。これは大学院修士課程修了レベルでの教育・訓練, 研修の場として, 三年前からスタートしている集会である。筆者は, 先に記した症例発表の他に, 滝野功氏(日本心理センター)の「初回(初期)面接とその記録をめぐる」と題する研究発表での, コメンターの指名をうけ, いくつかの視点を提起し, 討議を巻き起こすことができた。また氏のカルテ作りの視点を学ぶことができた。

この研究集会で, 新しく学会を創る要望が高まり, 本学村上英治教授らとともに発起世話人として名を連ね, 昭和57年3月に「日本心理臨床学会」を発足させた。かかる学会が誕生して, 再び問題になるであろう課題の一つは, 心理臨床家の資格, 訓練の明確化であり, 教育プログラムの確立と定式化である。筆者は, この問題を見据えるべく, 学部学生段階での実習・演習の一つのモデルとして, 半期30時間で行なわれるカウンセリングないし臨床面接法のテキストをまとめ, 世に問うことにした。幸い新曜社の好意によって, 出版されることになり, 次年度には間に合う運びである。

3. 臨床青年心理学への接近。これは共同研究として池田博和助手らと, 過去5年に涉って取り組んできている。今年度は, 学部紀要に二本まとめることができた。一つは「同一性障害の症例」に関する報告(研究紀要第28巻, 56・12)であり, もう一つは池田助手筆頭執筆による「対人恐怖の人間学, その1. 病例提起」(研究紀要第28巻, 56・12)である。なお筆者は, この共同研究を教育学部での特定研究(教育'60年代研究)に位置づけ, 投稿中である。

4. グループ・アプローチ, エンカウンター・グループの実践研究。

本学学生相談室主催の第5回自己発見のための合宿セミナーが, この年に中津川研修センターで行なわれた。昭和56年度文部省厚生補導特別企画の補助を得て, この度も無事終了した(名大学生相談室, 57. 3)。また過去3カ年の名大における自己発見グループの成果も所収されている成書が, 村上英治教授, 佐治守夫東大教授らの編集でようやく発刊された(『グループ・アプローチの展開』誠信書房, 56. 6, 73~103頁)。これらは, 大学生の自己発見, 対人関係の促進・訓練のための貴重な手引き書である, と自負している。“名大方式”の提言である。

また病院看護婦集団に行なわれたグループ・アプローチもまとめることができた(永田良昭・佐々木薫編『集団行動の心理学』第11章・有斐閣, 近刊予定)。

5. 特定研究「わが国における人間関係の比較的・総合的研究」では, 丸井・村上両教授, 池田助手らと教育臨床班を作り, シンポジウムをもち, それを踏まえて, 名古屋市内小・中学校を対象に「教育臨床場面における人間関係の研究」を行ない, 目下資料整理中である。

6. 1981年度世界精神衛生連盟・マニラ会議への出席。

7月27日から8月1日まで, マニラ国際会議場を主会場として開かれた会議に, 出席する機会を与えられた。前年度の国際心理学会議と同様に, 精神衛生をめぐる諸現実について, 見聞を広めることができた。特に, 途上国のこの問題に対する関心の強さと熱意・エネルギーに

は目を見張る思いがした。会議は全体会が5本の基調講演、分科会（ワークショップ）が22本組まれていた。筆者は、ワークショップを「学校精神衛生」に限定して出た。この帰朝報告は、日本心理学会大会期間中のアーベント『文化と人間の会』（56. 9）と名大教育学部の臨床リサーチ会議（56. 10）にて行なった。

7. その他の活動など。

「アンビバレンス」他28項目（石部元雄・伊藤隆二他編『心身障害辞典』福村出版、56. 4）

「瀬戸内・周防大島におけるイワシ網漁の集団にみられた子ども・老人・女性・男性の役割と体験について」（第7回コミュニティ心理学シンポジウム・博多会議。口頭発表、57. 3）

「人格」（日本教育心理学会編『教育心理学年報』第21集、1981年度、91頁、57. 3）

「推薦入学制度の功罪をめぐって——筑波大学での学生相談会議に出席しての報告」（名大学生相談室報第12号、57. 3）

研 究 経 過 報 告

若 林 満

1. 研究活動と学会報告

本研究室を中心に2つの共同研究が一昨年度から進行している。その1つは女子短大生の職業自己像の形成に関する研究で、「力強さの自己イメージ」尺度と、大学生活への適応、性役割タイプ、職業選択との関係が追求された。共同研究者である後藤宗理・鹿内啓子先生と相談し、この研究を縦断研究に移行させるべく目下検討中である。この研究活動の成果は、日本心理学会第46回大会と東海心理学会第31回大会で発表された。第2の研究は、愛知県婦人労働サービスセンターの委嘱を受け、職場適応研究会を中心に婦人の職場適応問題について調査を行なうものである。昨年度は婦人管理・監督職のキャリア形成の条件について、富安玲子・湯川隆子先生や職場の代表委員と研究を進め、これら婦人における職業自我同一性、キャリア促進要因・阻害要因、職業と家庭との両立問題などについて調査がなされた。この研究の結果は、同じく日本心理学会と東海心理学会において発表された。なお上記研究の一部として、約30名の婦人役職者を対象とした面接調査が行なわれたが、その結果は現在分析中である。本年度は婦人の処遇問題が研究テーマとして予定されている。

2. 執筆活動

女子学生の職業自己像に関する研究は、鹿内啓子・後藤宗理先生との共同論文として本紀要にまとめられている。また、上記研究の発展としての保母と看護婦における職業自己像の形成過程の横断的分析結果は、やはり共同論文として本紀要に掲載された。働く婦人に関する調査の結果は、富安玲子・湯川隆子先生と共同で、「婦人の管理・監督職に関する調査—地位形成の条件」と題する報告書（愛知県婦人労働サービスセンター刊）としてまとめあげた。昨年度は「組織の行動科学」（西田耕三・若林満・岡田和秀編、有斐閣）が刊行され、その中で3つの章の執筆を担当した。また、「組織メンバーの動機づけ」（関本昌秀編、組織と人間行動、第6章、泉文堂）、「満足と行動」および「キャリア開発と組織開発」（二村敏子編、組織の中の人間行動、6章と11章、有斐閣）と題する分担執筆にも参加した。以前の共同研究をまとめる形で、「慶応方式による管理能力アセスメント」（労務行政研究所、管理職の登用・選択手法、71~91）を、佐野勝男・榎田仁先生との共同論文として発表した。現在「経営の心理」（佐野守・若林満編、福村出版）が進行しているが、その中で2つの章を佐野守先生と共同で分担した。また現在刊行中の「経営行動科学辞典」では13項目の執筆を担当した。